The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「思う我」から「働く我」へ : 近代フランス哲学における二元論の展開と自我論の変貌
Author(s)	望月, 太郎
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3129350
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 9 】

氏　　名	望　月　太　郎（もち　づき　た　ろう）
博士の専攻分野の名称	博　　士（文　　学）
学　位　記　番　号	第　13324　号
学位授与年月日	平成 9 年 6 月 11 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学　位　論　文　名	**「思う我」から「働く我」へ** **―近代フランス哲学における二元論の展開と自我論の変貌―**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　山形　頼洋 （副査） 教　授　里見　軍之　　教　授　溝口　宏平

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は，「第１部　デカルトにおける自我の条件」と「第２部　十八世紀フランス哲学における二元論の展開と自我論の変貌」からなり，近代フランス哲学の最も際立った主題の一つである自我論の形成過程を問題史的に追う。時代は十七世紀から十八世紀にわたり，考察の対象とした主な哲学者はデカルト，マルブランシュ，コンディヤック，ボネ，リニャックに及ぶ。デカルトの「思う我」が，マルブランシュにおいて「感じる我」となり，十八世紀に入って「感じる我」が，イギリス経験論の影響を受けた上記の三人の二元論者リニャック，コンディヤック，ボネによって積極的な内容を盛られて深化され，さらには身体をも含み，身体とともに「働く我」として成長し，やがて十九世紀においてメーヌ・ド・ビランの哲学として花開くことになる，というのが論者の描いた全体の流れである。その流れはまた，デカルトにおいて構想された思惟実体・精神としての一般的，三人称的自我から，個体的，一人称的自我への変容を意味するが，その変容は論者の理解では，デカルトの実体・精神としての自我が周縁部に陰として曳いていた，ないしは前提として隠し持っていた，個体的で一人称的な自我の面が十八世紀になって全面的に展開したということになる。このような理解に基づいて，デカルトを扱う第１部は，デカルトの「思う我」の個体的，一人称的側面に光を当てる。

第１部第１章では，デカルト哲学における記憶の問題が，自我の同一性との関係で論じられる。デカルトは方法的懐疑の末に「我在り」に到るが，記憶の働きがなければ方法的懐疑はその企てをやり遂げて自我を発見することができなかったであろう。まず，この事実が『省察』のテクストに則して指摘される。方法的懐疑を構成する「すべてを疑う」という決意は，絶えず思い起こされて，持続しなければならない。さらに，この懐疑によって獲得された成果は，逐次，私の記憶に深く刻まれて，省察の次の一歩を支えるのでなければならない。もっと一般的にいえば，「第二省察」の冒頭のデカルトは，自分が昨日「第一省察」を遂行したことを思い出さなければならない。

しかし，このような『省察』の反省を可能にするような記憶について，デカルト自身は主題的に語ることはなかった。彼が『人間論』で扱った記憶は，物質的なものに限られている。そのような記憶をデカルトの方法的懐疑は容認することはできないし，ましてや自分の働きの足場とすることもできない。ここで，論者が注目するのが，デカルト

の別の記憶の概念，身体から独立した「知的記憶」(memoria intellectualis) である。この記憶についてデカルトは多くを語らず，断片的な記述しか残していないが，本論文はこの記憶の全体像を以下のように描出する。知的記憶の対象を一括すれば，それは「本有観念」(ideae innatae) と呼ばれる知的対象である。本有観念は，我々が生まれながらにして持っている純粋に知的なものとして，知的記憶によって我々のうちに保存されていなければならないだろう。他方，全ての人が生まれながら所有しているにもかかわらず，全ての人が等しくその存在に気づいているわけではない。デカルトによれば，或る観念が我々に本有的であるとは，我々のうちにその観念を喚起する能力 [facultas illam (ideam) eliciendi] があるということにほかならない。さらに，本有観念に気づく人とそうでない人がいるということは，この能力が発展と展開の程度を許すものであり，鍛練と陶冶の可能性を秘めたものでなければならない。この意味で知的記憶は可塑的な能力であり，これを論者は「精神のハビトゥス」と名付ける。この知的記憶によって，経過する『省察』の反省は，同一人格のデカルトの行っている反省として維持され，本有観念である「自我」の提示にまで到り，また，デカルトはそのようにして見いだした自我をほかならぬ自分の自我として認めるのである。

第2章は，デカルト的自我の個性 (individualité)，個別性を扱う。デカルトにおける自我の個性の問題はこれまで思惟実体の数の問題として研究されてきたが，この問題はまず，コギト認識の自己性の問題として，すなわち自分がほかなぬ自分であるという自己認識の問題として立てられなければならないことが指摘される。デカルトにおける自我の自己認識は，誇張された懐疑において発揮される意志の最高度の自由，積極的非決定性の自由のうちに，一人称的な私の自我として達成される。しかし他方，思惟実体として理解された精神のうちに個別的な自我の場所を探そうとするならば，思惟実体が複数個存在するという主張をするしかないが，デカルトの形而上学においては複数個の思惟実体が存在することの可能性は保証されてはいても，現実にも複数の思惟実体が存在することは何ら確実なことではない。

第3章は，デカルトにおける他我認識の可能性を論じる。デカルト哲学は独我論の牙城のように考えられてきたが，この章はまず，『方法序説』における公衆の概念を分析して，デカルトが学の在り方の正しさを判断する主体的審判者として，理念化された公衆を想定していたことを明らかにする。この予備的考察の上に，論者は，デカルトにおける他者・他我の問題が正しく論じられる場所は，彼がエリザベト宛の手紙に「第三の原始概念」として画定する心身合一の次元，すなわち生の実践的な場においてであると，指摘する。このような観点から論者は，『情念論』の「高邁」(générosité) の概念に注目する。高邁の感情は，自己のうちにある自由意志を正しく使用することから生まれる，自己の自由への信頼に裏付けられた自己尊敬である。しかし，それは同時に他者尊重でもある。少なくとも，他者を排除しない。というのも，高邁が，(1)新しいものによって不意打ちされるときの感情である驚きをその根底に含み，また(2)自由の観念は普遍性を持つ本有観念であり，(3)高邁は，自己を相対化する点で，傲慢から区別されるからである。

第2部では，十八世紀フランス哲学における自我論の変容が論じられるが，それに先立って，デカルトと十八世紀の哲学者たちとを媒介するマルブランシュが重要な転回点として取り上げられる。デカルトにとって「精神は物体よりもよりよく知られる」が，マルブランシュの主張では，我々には精神についての観念は与えられていず，したがって，我々は精神の本性について明晰判明な認識を持つことはできない。ただ，「意識ないしは内的感情」によって，私は自分の存在することを感情において知るけれども，自分が何であるかについての認識は持っていない。他方で，自己知に関して本性認識を拒否する彼の考え方は，実体の実在的本質は認識されえないというロックの不可知論と合い通ずることによって，イギリス経験論との出会いを十八世紀フランス自我論に可能にしたと，論者はまとめる。

ところで，マルブランシュにとって感情による自己知は観念に基づく認識ではないとの理由で，消極的な意義しか持たなかったが，十八世紀フランス哲学は「感じる我」に自己認識の積極的な意味を盛ることになる。すなわち，唯物論を退けると同時に，デカルト的な思惟実体によらずに自我の精神性を護るために，個として直接感じられる我が根本に据えられる。ここにフランス・スピリチュアリスムの源流が位置すると論者は見る。「感じる我」が，身体をも組み込んだ「働く我」としてさらに把握しなおされる過程が，経験論の方法を自身の哲学に取り込んだ十八世紀仏語圏の三人の哲学者，ルラルジュ・ド・リニャック，コンディヤック，シャルル・ボネにおいて跡付けられる。

第1章「自我と感情」では，リニャックの自我論を軸に，三者の自己知をめぐる思考様式の比較が試みられる。感

覚主義者のコンディヤックやボネが，自我の人格的同一性の根拠を，絶えず変容する感覚の諸様相を保存統一する記憶に求めたのに対して，リニャックは，「内奥感」(sens intime)によって直接感じ取られる自我の不変の「基底」(fond)に見る。第2章「自我と身体」では，身体論に関して，コンディヤックとリニャックが比較される。コンディヤックの彫像の仮説において，彫像の身体は，運動する手の触覚表象として，自我にとって外的に与えれる。これに対して，リニャックにあっては身体は自我の基底において精神と共存するものとして，内奥感によって感得される。しかし，リニャックの内奥感の捉える精神と身体との共存在はあくまで静的で，のちにメーヌ・ド・ビランが定義しなおす「内奥感」によって覚知される，意志された努力とそれに抵抗する対項との間に見出される力動的関係はまだない。第3章「自我と記号」では，主にコンディヤックの記号論から自我の問題を取り上げる。彼にとって自我は，多様な諸感覚の束である以上，自我は複合観念にすぎず，したがって，要素的感覚に対応する記号によって構成される虚構の存在である。恣意的な制度的記号の産物である。しかし，後期のコンディヤックは，算術・代数という「よくできた言語」の考察から，最も自然で必然的な「行動的言語」(langage d'action) という普遍言語へと進む。論者は，行動的言語の本質を規定している「自然」の概念を，記号の始まりに想定される身体の原始的共同性への示唆と解釈する。このように理解された行動的言語の文脈に置かれるならば，自我の観念は行動的な意味によって規定された必然的で自然なものとなるであろう。

最後に，付論として，ボネが初期メーヌ・ド・ビラン思想の形成に重要な影響を与えたことが考証される。ボネは精神の自発的活動性と自己限定性を自我の働きの根底に据えたが，彼の感覚論的傾向のゆえに，それらの概念を十分に彫琢するには至らなかった。これらの概念を批判的に受容することによって，『習慣論』以前の，すなわ自我を努力として確立する以前の初期ビラン思想の大枠が決定されていることを，実証的に明らかにする。

論文審査の結果の要旨

本論文の成果として，特筆すべき事柄がある。それは本論文第2部の核心部をなすリニャックとボネについての研究である。我国は言うまでもなく，フランス語圏においても，従来，十八世紀後半から十九世紀始めのメーヌ・ド・ビランに至るフランス哲学史の研究には大きな空白がある。百科全書派を中心とする啓蒙思想の興隆の影に隠れて，デカルトからメーヌ・ド・ビランに連なる観念の歴史が一瞬途絶したかのようである。フランスにおいてもこの空白を埋める努力が最近，メーヌ・ド・ビラン研究の発展とともに，本格化する動きを見せているが，論者自身，我国では見ることのできない，これらの研究の資料を求めて，ジュネーブ大学の図書館やフランスの国立図書館に機会あるごとに通い，筆写を含めて資料収集に努めた。フランスにおいても彼ほどリニャックやボネについて直接文献にあたった研究者は多くないと思われる。本論文は，これら哲学者の重要性を明らかにし，とりわけ我国における，これからの十八世紀フランス哲学史の研究のための基礎を置くとともに，自我論の歴史的考察のために貴重な問題提起を果たした。

本論文の特徴は，自我という概念の変遷を十七世紀から十八世紀という長い期間にわたって追求した点にある。このような手法が論者にある種のフラッシュ・バックを可能にし，その結果，十八世紀的な自我論からデカルトの自我を逆照することによって，第1部第1章で論じられた，デカルトのコギトにおける記憶の役割が，デカルト哲学の研究の新たな課題として提起された。ほとんど論じ尽くされたかに見えるデカルト哲学研究においての，新たな問題の発見は，論者の研究水準の高さを自ずと証明している。第2章の個性の問題についても同じことが言える。しかし，ここでは，問題設定の新鮮さというよりは，問題の処理の適切さが評価されるべきである。また，『方法序説』においてデカルトにとっての公衆の意味を読み解き，それを他者の問題へとつないだのは，この問題に対する新しいアプローチとなった。

このように多くの優れた成果を挙げた本論文ではあるが，幾つかの点で改善の余地があるように思われる。まず，デカルトの「知的記憶」，個別性の自己認識の根源にある「自由意志」さらには「高邁」という三つの概念の関係につ

いてさらに深く論究することによって，三者の間に何らかの内的連関を追求する必要があるのではないか。また，フランス哲学史におけるひとつの転回点としてマルブランシュ研究の重要性を改めて浮き彫りにしたことは本論文の付け加えるべき成果ではあるが，彼の哲学の内容に立ち入って，デカルトの自我論との差異をいっそう詳らかにすべきではないか。さらに第2部において，議論の整理の仕方に工夫が求められる。個々の哲学者の問題はよく記述されているが，哲学者相互，問題相互の連関の考察がいくぶん不徹底となっているため，哲学者間の相互比較が論者の意図した通りには達成されていないという印象を与える。しかしながら，これらの不備も，未開拓の分野に踏み込んで試行錯誤を余儀なくされた本論文が支払わなければならなかった代価と考えられるから，本論文の数々の優れた成果を得るための必要経費と見なすべきであろう。本委員会は，本論文が博士（文学）の学位に十分に値すると認定する。